

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10114

研究課題名（和文）社会状況の変化と個人状況の変化が健康と生活習慣に及ぼす影響

研究課題名（英文）Effects of changes in social and personal circumstances on health and lifestyle

研究代表者

柿崎 真沙子（KAKIZAKI, MASAKO）

名古屋市立大学・医薬学総合研究院（医学）・講師

研究者番号：20580872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2005年以降の社会状況の変化（2008年の世界的不況、2011年の東日本大震災等）の影響および調査期間中の個人属性（雇用状況、教育歴、婚姻状況等）が健康や生活習慣にどのように影響しているのかを検討した。日本に居住する中高年者において、2011年に起きた東日本大震災によりK6の得点が短期的に上昇する傾向が見られ、その傾向には地域によって違いが見られた。2008年の世界経済不況によって、日本人中高年者の喫煙状況、飲酒頻度は少なくとも短期的に減少していたが、男女ともにメンタルヘルスは悪化していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における中高年者の大規模縦断調査により、世界的不況や震災といった社会状況の変化が、心理的ストレスや喫煙、飲酒といった生活習慣に影響を及ぼしていることが本研究より示唆された。またその影響は、居住地や職業、性別によって異なることも示された。この結果より、社会的状況の変化があった際には特にメンタルヘルスについてはサポートが必要である事が示された。

研究成果の概要（英文）：We examined how changes in social conditions since 2005 (e.g., the 2008 global recession and the 2011 Great East Japan Earthquake) and individual attributes (e.g., employment status, educational background, marital status) during the study period affected health and lifestyle habits.

Among middle-aged and older adults living in Japan, the 2011 Great East Japan Earthquake caused a short-term increase in K6 scores, and this trend differed by region; the 2008 global economic recession caused at least a short-term decrease in smoking status and frequency of alcohol consumption among Japanese middle-aged and older adults, and mental health worsened for both men and women.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：中高年 災害 不況 メンタルヘルス 生活習慣

1. 研究開始当初の背景

日本の自殺死亡率は1998年に上昇し、その後減少しているが以前諸外国と比較し高い水準である。この1998年の自殺死亡率上昇はバブル崩壊の影響とも言われているが、諸外国ではバブル崩壊のような経済不況が、死亡リスクを上昇させるという研究だけではなく、生活習慣を改善し、死亡リスクを減少させるという報告もあり、経済不況の健康影響に関する研究結果は一致していない。

さらに、このように経済不況が起こると、雇用状況に変化が生じる。雇用状況の変化が健康に及ぼす影響として、例えば、退職年齢が高いことがその後の認知機能や認知症罹患と関連することを示唆する報告や、退職が身体機能の低下や慢性疾患と関連することを示すレビュー(van der Heide et al., 2013)がある。

その一例として、メタボリックシンドローム(メタボ)該当者の割合は男女とも年齢上昇に伴って割合が上昇しているが、50歳以降年齢が上昇するに従いメタボ健診受診率は減少している。これは退職以前に雇用先で参加していた健診が、退職後は利用できなくなること等の関連が考えられているが、個人の就業状況の変化に伴い健診受診が変化するかを検討した研究はない。このように経済不況といった社会状況の変化と、個人属性である雇用状況の変化がそれぞれ死亡や健康、生活習慣に影響することが示されているが、社会状況の変化、個人属性の変化の双方が、健康や生活習慣にどのように影響するかという点について検討した研究はない。

2. 研究の目的

本研究では「経済不況といった社会状況の変化によって健康や生活習慣は変化するのか、その影響は個人属性(雇用状況、教育歴、婚姻状況等)によって変わるのか」という点について明らかにするために、2005年に開始され、現在でも調査が継続されている厚生労働省による中高年者縦断調査のパネルデータを用いて、2005年以降の社会状況の変化(2008年の世界的不況、2011年の東日本大震災等)の影響および調査期間中の個人属性(雇用状況、教育歴、婚姻状況等)が健康や生活習慣にどのように影響しているのかを検討する。

3. 研究の方法

2005年より厚生労働省により実施されている中高年者縦断調査は、全国から無作為抽出された50-59歳の男女40,877人を対象としており、毎年11月に追跡調査が行われている。

(1) 東日本大震災が心理的ストレスに及ぼす影響

2005-2014年までの10年間(計10回)の調査データを用い、第1回、第2回調査の両方に回答した者31,403名を対象とした。解析に用いた延べ観察データ数は217,010件であった。東日本大震災の影響は、調査年をダミー変数にして用い、2009-10年を基準とした、前回の調査から新たにK6の得点が5点以上(心理的ストレス相当)、10点以上(気分・不安障害相当)になった者の割合の変化を解析した。共変量として、性別、年齢、婚姻状況、就業状況、持ち家の有無、教育歴、主観的健康感、がん・心筋梗塞・脳卒中の有無、入院の有無、飲酒、喫煙、世帯収入、居住地域を用いた。解析には一般化推定方程式を用い、欠測値に対してはIPW推定量(Inverse Probability Weighting)による重み付けを行った。

(2) 世界経済不況が喫煙状況および飲酒頻度に及ぼす影響

2005-14年の10年間(計10回)のデータを用いた。解析に用いた延べ観察データ数は251,368件であった。世界経済不況の影響は、調査年をダミー変数にし、世界経済不況直前の2007年を基準として用いた。喫煙状況は喫煙の有無を、飲酒頻度は「毎日飲む」から「ほとんど飲まない/飲めない」までの6件法による回答を用いた。回答者の経済状態は、2005-07年の夫婦所得の平均値(4分位)およびそれに対する2010年の夫婦所得の減少割合を用いた。共変量として、社会人口学的変数、健康状態を含めた。解析には一般化推定方程式を用い、欠測値には多重代入法(10ファイル作成)により補完を行った。

(3) 世界経済不況が心理的ストレスに及ぼす影響

2005年の調査回答者34,240人のうち2005年の調査回答者34,240人のうち、2007年以前と2008年以降に一度でも回答した33,815人を分析対象とした。精神的苦痛の評価には、6項目のケスラー心理的苦痛尺度(K6)を用いた。評価された社会経済的マトリックスには、教育水準、雇用形態、所得が含まれた。人口統計学的因子、健康行動、健康状態が共変量として用いられた。解析には一般化推定方程式を用い、欠測値には多重代入法(10ファイル作成)により補完を行った。

4. 研究成果

(1) 東日本大震災が心理的ストレスに及ぼす影響

2009年から2010年の変化と比較して、2010年から2011年に新たにK6が5点以上、10点以上となった者は増加傾向であった。地域別に解析すると、特に被災3県(福島、宮城、岩手)に居住する者で多い傾向にあった。また、年齢が60歳以上の者で多くなる傾向があった。

(2) 世界経済不況が喫煙状況および飲酒頻度に及ぼす影響

喫煙では、2007年と比べると、2006年以前は変化がなかったものの、2008年以降で有意に喫煙しにくいという結果だった。この変化は、タバコが値上げされた2010年以前の2008、2009年でも観察された。飲酒では、2007年と比べ、2008、2009年で頻度が減少していた。しかし、2010年以降は有意な飲酒頻度の変化はみられなかった。喫煙状況、飲酒頻度におけるこれらの傾向は男性で顕著だった。また、喫煙状況、飲酒頻度ともに、調査年と経済状態との交互作用は認められなかった。

2008年の世界経済不況によって、日本人中高年者の喫煙状況、飲酒頻度は少なくとも短期的に減少していた。経済不況というイベントは、本人の経済状態の如何に関わらず、中高年者層全体の喫煙および飲酒行動を抑制する可能性が示唆された。

(3) 世界経済不況が心理的ストレスに及ぼす影響

2008年の経済不況後に男女ともにメンタルヘルスが悪化することが明らかになった(オッズ比[95%信頼区間] = 男性: 1.11 [1.07-1.15]、女性: 1.14 [1.10-1.18])。自営業の男性の精神的苦痛(1.08 [1.02-1.14])は悪化した。最も学歴の低い女性では、精神的健康苦痛の悪化は、自営業の男性(1.08 [1.02-1.14])と比較して少なかった。高学歴で大卒の女性に比べ、精神的健康苦痛の悪化は少なかった(0.89 [0.80-0.98])、0.89 [0.80-0.98])。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村山洋史、駒沢行寛、柿崎真沙子、福田吉治、田淵貴大
2. 発表標題 世界経済不況が喫煙状況および飲酒頻度に及ぼす影響：中高年者縦断調査データの解析
3. 学会等名 日本疫学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柿崎真沙子、村山洋史、田淵貴大
2. 発表標題 東日本大震災が心理的ストレスに及ぼす影響：中高年者縦断調査データの解析
3. 学会等名 日本疫学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野口泰司、柿崎真沙子、金雪瑩、村山洋史、丹治史也、斎藤民、田淵貴大
2. 発表標題 家族介護者の介護終了後のメンタルヘルスと近隣との社会関係：中高年者縦断調査
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村山 洋史 (Murayama Hiroshi) (00565137)	東京大学・高齢社会総合研究機構・特任講師 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田淵 貴大 (Tabuchi Takahiro) (20611809)	地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪国際がんセンター (研究所)・その他部局等・がん対策センター疫学統計部副 部長 (84409)	
研究分担者	丹治 史也 (Tanji Fumiya) (80848242)	日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・助教 (31403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関